OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	嵯峨八景図屏風 ～やまと絵で描く「日本の原風景」～
Author(s)	大森, 正夫
Citation	デザイン理論. 2012, 59, p. 112-113
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53389
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

嵯峨八景図屏風
～やまと絵で描く「日本の原風景」～

大森正夫／京都嵯峨芸術大学

本作品「嵯峨八景図屏風」は，日本人の原風景観を絵画化という方法で研究した成果をやまと絵という絵画手法によって具体的に創作したものである。

さまざまな芸術分野において国風文化が花開く平安時代，日本人の感性と風景観を描くにふさわしい日本固有の絵画技法として「やまと絵」と称される絵画表現も確立している。しかし今日，日本画制作とは技術的に異なる「やまと絵」を描ける者は少なく，新作を見る機会は皆無に等しい。また，日本の原風景として位置づけられる平安期の嵯峨野の風景を絵画として描いたものもない。

そこで，日本の原風景としての嵯峨野を習慣や景物などを総合的に調査しながら，古典的な「やまと絵」の描画法を研究し，絵画技術を有し制作が可能な仏画師たちとの共同制作によって４曲１双の「嵯峨八景図屏風」（約 W：4000mm × H：1250mm）を制作した。

また，これまでにない制作研究であることから本屏風制作に関する「やまと絵」の描画法と「嵯峨野」についての研究内容を説明用の冊子（Ａ５版，164頁）として発刊した。

本制作屏風についての要旨を以下に記す。

【嵯峨野について】

「野は嵯峨野さらなり」と，平安時代を代表する随筆『枕草子』は記している。嵯峨野は，数多くの野宮があったことからも知られるように斎王の禊ぎ所としての聖地であると同時に，さまざまな催し（小松引き，舟遊び，観月，鷹狩りなど）が行われる遊興の地でもあり，数ある景勝地の中でも特別な存在として都人に愛されてきた山紫水明の地である。ゆえに皇族貴族の別荘や寺院が多く建立され，この地で織りなされた人間模様は多くの文学を生み，多くの歌が詠まれてきた。しかし，嵯峨野の全貌を端的に言い表した平安期のものは見当たらない。時を経て，日本の景勝地として嵯峨野が詠まれたものとして，江戸時代の儒学者・貝原益軒が京都を訪れた際に詠んだとされる「嵯峨八景」がある。

【八景画について】

風景を描く形式に，八景画という方法がある。八景画は室町時代に輸入した中国の洞庭湖周辺の八つの風景を描いた「瀟湘八景図」に由来するものであるが，日本固有の発展を遂げ，八つの地理的な名所や社寺・旧跡を選び，それぞれのお題をあげて襖や屏風，画軸などに描く風景の表現形式として，日本的美意識を代表する形式として昇華し，日本各地の名所を詠む題目として定着している。

【嵯峨八景について】

貝原益軒の選定は秋の情景に比重が傾いているものの四季折々の情景がバランスよく並べ，語句から想像されるものとして「花鳥風

月」といった日本美の象徴が良く現れている。嵯峨野の景物に日本美の原型を見いだし，八景を通して空間と時間の微細なうつろいが日本文学の原風景を裏付けるものとして理解できる。八つの題目は，峨野春草・亀峰緑樹・野宮松風・広沢秋月・小倉紅風・清涼晩鐘・宕嶺積雪・洪川水鳥である。

【やまと絵について】

平安期の屏風や襖障子に描かれたとされる最盛期のやまと絵の特徴は，画題としては日本の四季の風物や名所，年中行事などを組み合わせたものであり，その表現方法は画面中のひとつの出来事に焦点を当てたり強調したりすることはせず，広く見渡した風景と共に人々の生活を淡々と描くところであったと推察できる。すなわち，唐絵との対比で述べれば，空想や誇張，力強い表現をせず，ありふれた日常の風景を柔らかな線で四季を織り交ぜて描くという日本独自の感性が，調度品としての絵画の有り様を示している。

【屏風形式について】

日本における古の表現媒体としては，屏風，絵巻，障壁画，そして軸物が大半を占めており，描画主題も周辺環境との調和を重視した装飾または調度としての性格が強いものであった。なかでも屏風は平安時代の室礼の一つとして日常生活のみならず特別な意味合いを持つものであった。この時代，皇族，貴族のあいだで数え四十歳から十年おきに算賀という長寿の祝う儀式が行われ，その際に被算者の後ろには屏風が必ず立てられていた。算賀の主催者は歌人に屏風に書き入れるための歌を詠ませ宴の度に屏風を新調して贈るなど，儀式の上でも最重要の調度品であった。

【制作にあたって】

一般的な日本画家では技術的に困難なため，古画の修復や模写技術を習得している日本画の古画研究工房の出身者（現在は日本画家や仏画師）を中心にした組織（嵯峨八景研究会：７名）を編成した。日本の原風景としての嵯峨野の解釈は上記の「嵯峨八景」を拠り所に調査したが，描写対象とする景物などについては平安時代の生活習慣，植生，祭礼習俗，人物描写，画面構成などの研究を文献やフィールド調査から行い，専門家の助言を得ながら幾度もの小下絵から大下絵への過程を繰り返し，絹本彩色への本絵描きを行った。

本研究制作は，2001年の春に開始し，約10年の歳月を経た2011年３月に完成した。